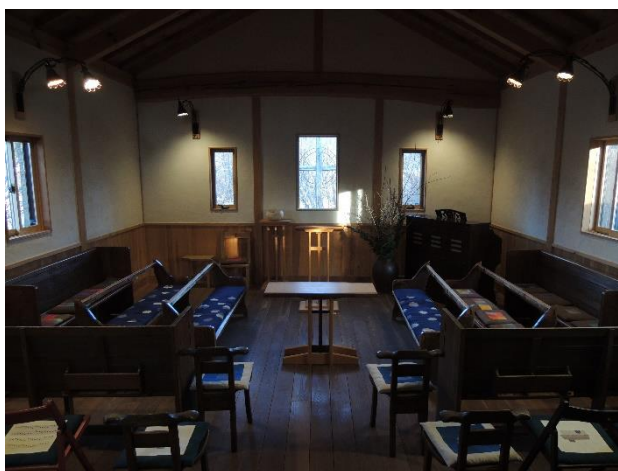


「マナ」があるということ

牧師 山本 護

**「病人をいやし、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、
ただで受けたのだから、ただで与えなさい。
帯の中には金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない(マタイ 10:8~9)」**

イエスはそう言うけれども、修道生活のように閉じられた弟子集団内のことではないか。そもそも私たちは病の癒しだっけ目の当たりにしたことがないのに。このように、腰が引けてしまう言い訳はいくらでもあるでしょう。とはいっても、イエスが命じた戒めは、閉じた集団内での働きではありません。むしろ旅先という不確定な(マタイ 10:10)、まったく開かれた場における思いきったふるまいです。



昨年の役員会で、かつて試みていた教会通貨「マナ」を再び通用させたい、という提案があり、手さぐりしながらゆるやかに実行し始めました。そして今度のマナは、以前のような日本円と均衡した対価にするのではなく、一つの行為や奉仕を「1 マナ」とし、収支ではなく出来事を記録しよう、というものです。対価表がないのでもはや地域通貨でもありません。このマナによって、私たち八ヶ岳伝道所の歩み方が、スローガンではなく出来事として共有されることをめざしています。

大正から昭和初期にかけて活動した経済学者、大熊信行は次のように語っています。「家庭というのは、飯を食べてもおカネを払わないで、ありがたいと言えばそこで席を立つことができる場所だ」。つまり、家庭が社会の原点である、と。初代教会のような暮らし方そのものは(使徒 2:44~45)、私たちにとって非現実的でも、大熊が言うところの原初の共同体感覚ならば、伝道所においていくらか実現しています。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」。このイエスの言葉を、自分への恵みとして受け取れるなら、私たちは無理することなく、それぞれが体験している原初の共同体感覚をこの地につくることができる。マナはそんな試みの一つです。社会や暮らしに電子マネーが浸透し、隅々が貨幣で価値づけられようとしている 2020 年、こんな時代のただ中であって、マナは流れに掉さず預言者の徴になるでしょうか。

イエスは「安息日(社会規範)は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない(マルコ 2:27)」と喝破しました。まさしくその通りに、神の多様な創造が尊ばれる「人のための安息日」を模索したい。教会世間の同調圧力を気にせぬよう、掲げた理想に苦しめられぬよう、今年もまた聖霊の風に吹かれて微妙な道を歩みましょう。Ω